

幼児期の間接互惠性の獲得を支える認知・情動的基盤の検討

最終更新日：2018年4月27日

【プロジェクト代表者】
教職教育院
助教
熊木 悠人

キーワード

・幼児 ・互惠性 ・利他行動

プロジェクトの内容（目的・方法・結果と意義）

◆目的

「情けは人のためならず」という言葉にあるように、人の社会では、他者に親切にすると、将来、自分も他者から助けられるという仕組みが働いています。この仕組みを間接互惠性と言います。間接互惠性が成立するためには、各個人が、不親切な人よりも親切な人に対して、親切にするという傾向を持っている必要があります。本研究では、幼児を対象として、親切な人を好む傾向や、親切な人に対してより親切にする傾向の発達について調べました。

◆方法

幼稚園に通う4～6歳児を対象に、個別調査を実施しました。参加児ははじめに「親切な人」と「不親切な人」が登場する映像を見ました。その後、①それぞれの人に対して自分が持つ10枚のシールのうち何枚を分けてあげるか、②「親切な人」と「不親切な人」のどちらが好きか、について回答しました。

◆結果

①シールを何枚分けてあげるかについては、相手が「親切な人」か「不親切な人」かによる違いはみられませんでした。他方、②好みについては、多くの参加児において、「親切な人」を好む傾向がみられました。また、シールの分配と好みとの間の関連がみられませんでした。

成果の応用可能性（私たちの活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。）

- 本研究の結果から、幼児が「不親切な他者」よりも「親切な他者」を好む傾向を持っていることがわかります。このことから、幼児同士の関係においても、親切な子どもが他の子からより好かれるということが起こっている可能性があると考えられます。この点について、さらに検討を重ねていくことで、幼児の仲間関係についてのより深い理解と、それに根ざした人間関係の指導につながると考えています。
- 今後、調査対象を小学生児童まで広げるなど、さらに研究を続けていくことで、人と人が互いに助け合うという仕組みが、子ども同士の間でどのように成立していくのかを明らかにしていくことにつながると考えています。

このプロジェクトの形成に寄与した制度等

平成29年度福岡教育大学研究推進支援プロジェクト経費

プロジェクト構成員（所属・職名・氏名・役割分担）